

アーティストインタビュー

国久暁さん

—よろしく申し上げます。さっそくなんですが、ご出身はどちらで？

国久：岩手県九戸郡軽米町。

—岩手で言うと？

国久：すごい北のほう。もう一步出ると青森、八戸。

—じゃあ、何となくイメージする田舎っていう感じの。

国久：田舎ですね。田舎。本当に山に囲まれて、360度山。人口が8,000人ぐらいかな。今もっと減ってるのかな。

—そんな中、小学校の頃とかはどんなお子さんだったんですか？

国久：小学校の頃は、なんだろう、たぶん、1、2年生の頃は時間が守れずに学校に定時通り行くっていう概念がなくて。1人、もう学校始まっている時間にぽとぽと歩いているみたいな感じの子どもで。

—ご家族としても、そんなもんかなみたいな。

国久：うちの両親共働きだったんで、家から出して、「はい、行ってらっしゃい」みたいな感じで、あとはどうなろうか知らなかったんでしょうね。だから私がどういうスピードで、たぶん家出る時間ももうアウトな時間に出てたと思うけど。全校朝礼始まっているのに、教室に誰もいないなと思いながら座ってたりとかするような。

—それはやっぱ怒られたんですか？

国久：いや、何も言われなくて。親とかは言われてたんだと思うんですけど。2年生の時とかは男の先生で楽しい先生だったから、半分なめて、ふざけて授業中走り回ったりとか、そういう子どもでしたね。

—それは中学年、高学年で変わったんですか？

国久：さすがに中学年、高学年になってくると、ああいけないんだなっていうのが。なんか3年生になってからの担任に、「あんた問題児だったのよ」みたいなことを言われて。その時、1、2年生の時は何も言われなかったから、気にしてなかったのに、3年生になって「あんた悪い子」って言われて、あ、悪い子だったんだと思って、ちゃんとしなきゃと思って、3年生ぐらいからちょっとちゃんとしようと思って。ちゃんとしようというか、登校班が始まったから遅刻はしなかったと思うし。ふつうに、ふつうになったと思うんですけど。

—その頃に好きだったものというか。

国久：なんだろう。好きだったもの。1、2、3年とかはやっぱドリフとかかな。お笑いが好きでしたね。だから、お笑いスタ誕とかまだやってる頃で、分かります？

—名前だけは。

国久：『お笑いスター誕生!!』。それこそ、イッセー尾形とかシティーボーイズとか出てきたような感じの。とんねるずとかも出てきてるのかな、ああいうのを観てたりとか。岩手県の放送局の都合で、ひょうきん族とドリフが両方観れたんですよ。あの時間って。

—ずれてたってこと？

国久：そうそうずれてて、本当は一緒の時間にやってたから、東京の人たちってどっち派に分かれたらしいんですけど。岩手はひょうきん族は土曜日の夕方ぐらいにやってて。ドリフはリアルタイムでやってたので、ずれて両方見れたんです

よね。そういうのが好きでした。よく。

—それは見逃さずに観てた？

国久：だいたい観てたと思います。

—それから、ちなみに演劇を始められたのは？

国久：5年生の時に、演劇部を作って、で、始めたってというのが、自分で始めたのがそれが最初です。

—小学校5年生の時。

国久：小学校5年生の時。

—そういう、部活みたいな、自分たちで作るみたいなのが結構あったことなんですか？

国久：いや、なくて。1年生の時に演劇部の公演があったのに、それ観たんですよね。『よだかの星』をやったのかな。宮沢賢治の『よだかの星』をやって、すごいかっこいいって思って。自分は4年生になったらクラブ活動始まるので、4年生になったら演劇部入るって思ってたのに、なくなっちゃってて、廃部になってしまって。で、4年生の時は諦めて適当なクラブ入ったんですけど、やっぱり演劇部やりたいなと思って。で、友だちに話したら割とやりたいって言う子多くて。で、その時の担任にその相談をしたら、「じゃあちょっと、嘆願書書いてごらん」って言われて、「嘆願書って」って言って。その先生に嘆願書とはって、書いて、校長先生に出して。校長先生、割と自由な先生だったんで、「いいですよ」って言って、作って、作るのが認められてできたっていう。

—なかなか小学校5年生にしては貴重な経験というか。

国久：たぶんあの時の担任がそういう先生だったんだろうなっていう。その先生

が顧問についてくれたので、道筋を作ってくれたというか。やりたいならやってみよう。こういうこともできるよっていうのを示してくれた担任でしたね。

—じゃあ、一番最初のきっかけというのは、やっぱり1年生の時に観た劇が。

国久：だと思えます。今思えば。

—それから小学校5年生でサークルというか部を作られて、その時はどんなものをやられてた？

国久：やっぱ民話劇みたいだったり、あるんですよ、小学校の学芸会用の戯曲集みたいなのがあって、それでやりたいのをみんなを探して、やってみようみたいな。で、学芸会自体はクラスだったり学年だったり。学年か、学年で演目やるんだってんだけど、そこに演劇部の発表っていうのを1個入れてもらえて。だから、演劇部の方は自分の学年の発表と演劇部の発表と両方練習しなきゃいけないんだけど、発表の場もせっかくあるから。そこを頑張ったりとか。あと、各行事にちょっと入れ込んでもらえたんですね。なんか、七夕だったかな。七夕集会とかって、七夕のイベントをやる時に、演劇部で1つやってみようって言われて時間ももらえたりとか。学年終わる時の6年生歓送迎会みたいな感じの集会とか、の時にはちょっと時間ももらえたりとか。で、ちょこちょこやりましたね。

—高校に入ってまた演劇部は、そこはあって。

国久：町を離れて、盛岡市内の演劇部のある高校に入って。それが目当てだったと言っても過言ではないぐらい。

—じゃあ、演劇部のある、活動しているような高校を探して。

国久：うん。演劇部が盛んな高校として探したのではなく、やっぱり下宿させてもらうので。うちの町にも高校はあったんですよ。高校はあったけど演劇部はなかったし。で、町から出るにはちゃんと出るなり的高校を受けなきゃいけないから。ナンバースクールを受けて。で、入れて、その演劇部に、演劇部やってた

から入るっていう。ただ、その演劇部はもう廃部寸前の2人ぐらいしかいないような演劇部だったり。そのちょっと前はだいぶ盛んだったようなんですけど。

—高校の中で演劇活動を、結構本格的にというか。

国久：本格的にというよりも、盛岡の高校演劇がちょっと特殊だったんですね。プロジェクトっていう、組織じゃないんだけど、演劇の地区大会を高校生が運営するんですけど、盛岡地区の演劇の大会を。その時のスタッフワークを各高校の演劇部の人たちで、なんつうんでしょね、出し合いですよ。装置、照明、音響。で、装置プロジェクト、照明プロジェクト、音響プロジェクトつって。で、中にはやっぱりうちの演劇部みたいに、劇団員2人とか、部員が2人、3人のとこってあるじゃないですか。そうすると、キャストにいちちゃって、スタッフワークができないから、その時そのスタッフワークを、そのプロジェクトの人たちがやってくれるっていう。で、仕込みから何から全部。そのためのプロジェクトっていうのがあって。で、そこで舞台技術の基礎を学ぶんですよ。ちゃんと学ぶ機会もあって、演劇部が夏にあるんですけど、たぶん前の年の秋ぐらいとかから集まって、で、舞台技術講習会みたいなものやってくれるんですよ。で、プランの立て方とか仕込みの仕方とかっていうのを全部指導してもらえる。それを当時の盛岡演劇界の人たちがやってくれてるっていう。なんかすごく恵まれた。

—20代を経て30代になって、なんか変化ってありました？

国久：だいぶ、やりやすくなってきたっていう。仲間が増えて。スタッフワークとかもなんなら自分で頑張ってたっていう。照明とかにしても音響にしても、ふだんは演劇やってない知り合いにやってもらったりしてたのを、だんだんスタッフさんとかにも。やっぱりこれも未来樹なんですけど、未来樹さんでスタッフは全部外注だったので、そこでスタッフさんと知り合うことができ、うちの公演もお願いしますみたいな感じで外注できるようになって、そうすると役者もやってるスタッフさんもいたりとか、そのスタッフさんつながりだったり未来樹つながりで、外の役者さんとも知り合いがで

きて、じゃあうちの劇団にも出てもらってって、いうのができるようになってきたのが30代ですかね。

大河原：やっぱり演劇をしたっていう欲求とか、この間、演出者協会も入ったばかりだし、まだ演劇を手放す気はないと思ってるんですね、国久さん。

国久：それはもちろん。ライフワークなので。

大河原：なんでですかね？

国久：なんででしょうね。なんだろう。でも、自分の表現方法として演劇が一番合ってるなっていうのは昔から思っているの。そこに特に疑いはないというか。

大河原：なんで自分をそこまで表現したいっていうふうに思うんですかね。

国久：溜めとけないからですよ。たぶん、どっかに吐き出しておきたいんだろうな。なんでだろう。なんか、生理的欲求の1つだと思っていて、演劇をしたいとかっていうのが、子どもの頃からおままごととか、そういうのって子どもの遊びとしてあるわけで、なんかその延長だと思っているの。演劇は生理欲求の1つだと思ってるんですけど。なぜみんなやらないんだろうっていうふうには思ってたんだけど。

大河原：生理的なものっていうことなので、おそらくは60になっても70になっても80になっても、続くものなのかなって思ったりするんですけど、国久さんにとって演劇っていうものは。ってなると、まだ道半ばじゃないですか。

国久：そうですね。

大河原：ここから先の目標とか夢ってありますか？

国久：演劇についての。演劇についての目標、夢。いろいろあるけど。(笑)。具

体的に1個みたいなはないけど。

大河原：全然抽象的でいいです。

国久：でも、よぼよぼになっても続けていきたいなとは思っているの。その時その時、目に見えているものを1個1個形にしていければいいな。その時全部書き切れているといいなっていうのはいつも思いますけどね。夢ね。夢ね。なんだろう。でも今のところは続けていくことかな。そうですね。

大河原：例えば、今より多くの人に見せたいっていうふうに思う方も僕は否定はしないですし、今よりも少ない人に見せたいっていう人もいてもいいと思えますし、今より知らない人に見せたいっていうのもふつうの欲求だと思うんです。これから無国籍としての作品をどこにどんなふうに提示していきたいっていうことだと思うんですよね。具体的に言えば。

国久：ずっと思っているのは、演劇を知らない人に届けたいっていうのは思っていて。ただ、なんとなく自分の作風として、多くの人っていうよりはそれこそ少ない人に届ける作品だと思っているの。確かにどうリーチしていくのかなっていうのは難しいなっていういつも思いますね。前は、劇場を一步出たら忘れちゃうような、ぱーっと笑って終われる作品にしたいって思っていたけど、最近書いているのはどっちかって言うと、家に帰ってずーんって考えてほしいなっていうものになってきてるので。お芝居自体を観たことない人に観てほしいのはもちろんなんだけど、知らないことを知ってほしいというか。そうか、知らないことを知ってほしいってなると、もっと多くの人に観てほしいっていうほうにつながっちゃうね。

大河原：その矛盾は全然あっていいと思います。

国久：観た人には持ち帰ってほしいっていう作品かな。

—今ちょっと、その先の、もうちょっとで開きそうな気がします。どんな人が目に浮かんでるんだろうって思って。それが30代、40代、子育てが少しひと段落

したけれども、時間はあるけど何をしようかっていう専業主婦の方なのか、10代、20代、学生なのか。50代、60代、

国久：年代問わず。サイレントマジョリティーかな。ふつうの人。ふつうの人。なんとなく世の中に、疑い持ってない人なんかいないかもしれないけど。半径何メートルの世界の中で生きてるような人。あれかな、選挙行ったことない人みたいな感じの人。そういう人に届けたい。

大河原：はい。すばらしいパンチラインをいただいたところで終わりにしたいと思います。